

伝記『慶太伝・立志編』について

宮原 豊（9組）

4月18日、信州青木村に生まれ、東急グループの礎を築いた五島慶太の伝記「慶太伝・立志編」が出版された。著者は根本忠一氏、発行人は青木村の北村政夫村長である。青木村が根本氏に執筆を依頼し、出版は慶太翁の生誕日に合わせたそう。

根本氏は、日本生産性本部で長年「職場のメンタルヘルス」を研究してきた。縁があって、2023年8月、信濃毎日新聞に「五島慶太 青木村と東急」を連載、それを読んだ北村村長が慶太翁の伝記執筆を依頼したもの。

平成30（2018）年8月14日、慶太翁の生家が落雷により焼失した。そのニュースに衝撃を受けたのは北村村長だけではなく、東急（株）常務執行役員の但馬英俊氏も同様であった。それは奇しくも慶太60回目の命日であったが、飯山に帰省していた但馬氏は「五島慶太の生家を焼く」という新聞記事を読んで直ぐに青木村に飛び、生家を守ってきてくれた人々の話を聞くにつけ、「五島慶太を過去の人物に終わらせてはならない」と覚悟を決めたと言う。それは北村村長と意気投合した瞬間でもあった。

その時から慶太の生家復元ならびに五島慶太未来創造館という二つの建設プロジェクトが始まった。焼失前に研究者が残した実測図面により復元された生家は「東急グループ慶太塾」としてグループ会社6万人の社員が一度は訪れるべき「聖地」となり、創業者・五島慶太の事業哲学を体得する場として蘇ったのである。一方、慶太翁を顕彰する施設を建設したいと考えていた北村村長は、途中から単なる顕彰事業ではなく「慶太翁は未来に生きる若者に何か伝えたいことがあったのではないか。慶太翁の生き様を記録し、後世に残していかなければならない。それが我々の責務だ」と感じ、それで「未来創造館」と命名したという。

慶太は生家の青木村殿戸地区から長野県尋常中学校上田支校（今の上田高校）まで約12キロの道程を3年間、雨の日も雪の日も一日たりとも欠席することなく通った。当時のことであるから当然徒歩である。その後2年間松本中学校に進み、卒業後も向学心に燃える慶太は東京高等師範学校（現筑波大学）、東京帝国大学に学び、農商務省で働き始めたのは29歳の時であった。五島慶太の伝記は今までいくつか出版されているが、この「慶太伝・立志編」の特徴は、主に鉄道事業に関わるまでの前半生のことを記述していることである。

五島慶太未来創造館を参観し、この「慶太伝」を読むと、何か内側から勇気が湧いてくる。最近、青木村の中学生が、慶太少年のように、生家から上田高校まで歩いてみようという企画し実行したそう。こういう試みは実に有意義だ。2時間半では着かない、3時間以上はかかる。慶太は往復6時間も歩いて通学し帰宅した後も、とぼしい灯りの下で夜半まで勉強したのだ。今は便利な車社会に生きているからこそ、慶太と同年代の少年たちはこのような実体験を通じて慶太の人生から多くのことを学んだようだ。これも五島慶太未来創造館の計算外の成果の一つなのだろう。

（2025年5月25日記）

五島慶太未来創造館 開館 5 周年記念特別展にて（4 月 19 日、筆者）



『慶太伝・立志編』

